



|              |                                                                                                                                                 |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ヴァルター・ベンヤミンにおける歴史性の問題                                                                                                                           |
| Author(s)    | 長澤, 麻子                                                                                                                                          |
| Citation     | 大阪大学, 2001, 博士論文                                                                                                                                |
| Version Type |                                                                                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/42229">https://hdl.handle.net/11094/42229</a>                                                             |
| rights       |                                                                                                                                                 |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

|               |                                                               |
|---------------|---------------------------------------------------------------|
| 氏 名           | なが 長 澤 麻 子                                                    |
| 博士の専攻分野の名称    | 博 士 (人間科学)                                                    |
| 学 位 記 番 号     | 第 1 5 9 2 3 号                                                 |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 平成13年 3 月 23 日                                                |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学位規則第4条第1項該当<br>人間科学研究科人間学専攻                                  |
| 学 位 論 文 名     | ヴァルター・ベンヤミンにおける歴史性の問題                                         |
| 論 文 審 査 委 員   | (主査)<br>教 授 三 島 憲 一<br><br>(副査)<br>教 授 木 前 利 秋    助教授 檜 垣 立 哉 |

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀ドイツのユダヤ人思想家ヴァルター・ベンヤミン（1892－1940）の歴史叙述における認識概念の解明をめざしている。彼の遺稿の「歴史の概念について」（1940）のなかで、ベンヤミンは、既にわれわれの過去として認められているものを歴史と呼ぶのではなく、むしろ歴史として認められてこなかった、いわば既存の歴史的連関の枠組みによって抑圧され、見落とされてきた事物を歴史の対象とする。そのためベンヤミンの歴史認識では、固定された対象やいわゆる歴史の変遷を包括的に捉えようとするのではなく、叙述者の現在において過去を抑圧する力が緩む瞬間、例えば支配的であった社会体制や価値観が崩壊するような「例外的状況」に垣間見える僅かな変化を捉えることが求められる。つまりベンヤミンの歴史認識によって見出されるものは既存の過去ではなく、彼の認識概念における時間性・歴史性に仕がって見えてくるものなのである。

とはいえベンヤミンは客観的実在を否定するのではない。確かに彼の認識をめぐる思考において客観的実在は概念による説明では把握されない。むしろ諸概念の記述はなされるのだが、それによって目指されるのは記述そのものではなく、記述に解釈されるべく立ち現れる「理念」の叙述である。つまり客観的実在としての「理念」は直接描き出されることはなく、ただ比喩的に「寓意」<sup>アレゴリー</sup>的にのみ認識され得る。というのも認識主体である人間がその時間性を越え出ることがないゆえに、客観的事物とその認識主体との間に受容という客観から主観の方向では連続があるものの、主体による認識作用という主観から客観の方向は断絶されているからである。しかも主観の側からの関わりが断たれているということは主観が受容する客観を歪みなく全面的に受容することになる。

この断絶ないし人間における越境の不可能性は、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』において、「内在性」、「出口なしの絶望感」として凋落へ向かい続けるバロック的時間意識と重なり合い、それゆえに世界は超越されたいわば形而上学的世界を写し出す寓意<sup>アレゴリー</sup>によってこそ理解されるとみなされる。事物の寓意<sup>アレゴリー</sup>とはそれ自身が生来もっていた「自然」な、通常理解されているような事物とは異なるものを指示する徴である。ベンヤミンは寓意<sup>アレゴリー</sup>を概念となったイメージとそれを固定化する記号をひとつにした図式として捉え、アレゴリー<sup>アレゴリー</sup>において事物は「隠された知の領域」への鍵とみなす。それはまた客観的実在を受容しつつも、同時にその認識は寓意<sup>アレゴリー</sup>という主観的に構成された仮象を捉えることでもあり、認識主体そのものもそのような仮象によって構成されるのである。それゆえバロック的な認識主体は、死という限界へ押し流されるしかない時間性のなかで、自身の主体のカタストロフすなわち死を回避しようと時間の流れに抗い、そのため主体を構成する仮象・寓意<sup>アレゴリー</sup>が常に反復されることになる。

こうした主体の在り方はベンヤミンによれば20世紀の劇作家ブレヒトにも見出せる。ブレヒトによる引用可能な身振りは彼の一連の寓意劇を構成するものだが、それは同時に生に固執するかぎり「身振り」の引用・反復をし続けなければならないわれわれの姿を捉えたものでもある。すなわちベンヤミンの歴史認識は、過去の歴史を捉えるものであるだけでなく、「<sup>アレゴリー</sup>寓意的認識」を示すことによって現在のわれわれの認識の在り方を問い直すものである。

#### 論文審査の結果の要旨

ベンヤミンの歴史についての考察を主題とした本論文は、『ドイツ・バロック悲劇の起源』の序文である「認識論的考察」および晩年の「歴史哲学的断片」を主たるテキストに取り上げ、「過去の救済における弁証法的イメージ」「起源と真理」「理念と経験的世界」の関わりなどの分析を手がかりにしながら、彼のいわゆるアレゴリー的思考のあり方に迫ろうとするものである。ユダヤ神秘主義やシュルレアリスムとの関連にも目配りが効いており、主査・副査（2名）とも、それぞれの専門の立場から高い評価を与えた。